

〔報 告〕

美術への「関心・意欲・態度」を高める相互鑑賞

本波 葉子*・隅 敦

The Mutual Appreciation to Improve the Interest, Volition, and Attitude Toward Art

Yoko HONNAMI and Atsushi SUMI

摘要

相互鑑賞のあり方を工夫することで、美術への「関心・意欲・態度」を高めるために有効な手段となりうるのではないかを検証する。授業を通して生徒がどのように変容していくかを注目し考察していく。

キーワード：相互鑑賞，関心・意欲・態度

Keywords：mutual appreciation, the interest, volition, and attitude

はじめに

平成20年3月に告示された学習指導要領の美術科基本方針に「創造することの楽しさ」「思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること」とともに「生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的に関わっていく態度をはぐくむことなどを重視する」¹⁾と記され、美術への関心・意欲・態度をはぐくむことが重要視されている。

生徒にとって興味が世界を拓くものとなるためのかぎとして、J.S.ブルーナーは、「教えられる教材そのものに固有の興味をますこと、生徒に発見感を与えること、われわれがぜひいいたいことを子どもに適した思考形態に翻案すること」²⁾などをあげる。生徒の実態を把握し、導入段階での課題の提示の仕方を工夫することが、課題への興味を喚起する際によく使われている方法である。しかし、目先の興味・関心を引き起こすというおもしろさを優先したものではなく、教えられる教材そのものに固有の興味をましたり、生徒に発見感を与えたりして、その単元への関心・意欲・態度をはぐくむ必要がある。長瀬荘一は、「学習指導の実際においては、関心・意欲・態度を育てることにより児童・生徒の技能や能力を伸ばす側面と、技能や能力を育てることにより児童・生徒の関心・意欲・態度を育てる側面の両方があることをよく心得ておく必要がある」³⁾と述べ、態度形成と能力形成が互に関連し合っていることを指摘している。

そこで本研究では、制作後の作品鑑賞場面に美術の最終段階で行う相互鑑賞を工夫することによって、関心・意欲・態度を高めることはできないだろうかと考えた。

相互鑑賞によって鑑賞能力を高めることと、相互鑑賞によって生徒に発見感を与えることの両面から、生徒の関心・意欲・態度を育てることができると考える。学習していた単元が終わっても、「生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的に関わっていく態度」をはぐくむために、効果的に働く相互鑑賞のあり方を考察したい。

I 美術の評価の観点にみる「関心・意欲・態度」の変遷

学習指導において関心・意欲・態度が重視される理由は、もっとも高い成果を得るために、意欲的な学びが不可欠だからである。評価の観点の中に、関心・意欲・態度が取り上げられるようになったのは、いったいつからだろうか。美術の評価の観点に関心・意欲・態度などの情意面の観点が導入されるまでに、どのような変遷をたどっているのか、昭和24年以降の生徒指導要録⁴⁾よりその変遷をみていく。

(1) 中学校生徒指導要録について（昭和24年）より美術の評価の観点

美の鑑賞
基礎技術の理解
創造的な表現

美の鑑賞が、第一の観点にあげられ、次に基礎技術の理解、創造的な表現となっている。美術においては「関心・意欲・態度」の観点はみられない。しかし、中学校の数学、理科、保健体育、家庭の4教科については、「態

* 富山大学大学院教育学研究科

度」に関する観点がみられた。

(2) 中学校生徒指導要録の改訂について（昭和30年）より

美術の観点とその趣旨

表現（描画，工作，図案）	（小中）表現技能だけでなく，それぞれにおける創造性を実現し，かっこ内の各項ごとに記入する。
鑑賞	
理解	

表現が第一の観点に上げられ，描画，工作，図案の各項目について記入することになる。また，理解の観点を別に設け，表現の観点の中にこれまで独立した観点であった表現技能と創造性について合わせて評価することになった。美術においてはこの改訂でも，「関心・意欲・態度」などの観点はみられない。しかし，美術と音楽以外の他の教科には，「興味・関心や態度」といった情意面の評価がみられるようになる。

(3) 中学校生徒指導要録について（通達）（昭和36年）より

美術の観点とその趣旨

絵をかく	美しく創造的に絵（版画を含む。）をかくことができる。
彫塑を作る	美しく創造的に彫塑を作ることができる。
デザインする	作品を味わい楽しみ，よい発想ができ，うまく計画し，提示することができる。
鑑賞する	作品を味わい楽しみ，その美しさを感じとったり，また，身近な造形品について批判・鑑賞することができる。
美術への関心・態度	美術に対して積極的な興味・関心を持ち，美術を愛好し，美術を生活に生かし生活を豊かにしようとする。

この通達により，これまで設けられていた「理解」についての観点がなくなり，初めて美術に関心・態度の情意面の評価が加えられた。5項目の観点のうちの最後の観点として「美術への関心・態度」が設けられた。音楽にも関心・態度の評価の観点が加えられ，この通達で，すべての教科に情意面の評価がみられるようになった。

前回の改訂では，表現の観点の中で描画，工作，図案の3項目に分けられて評価されていたが，今回の通達により，「絵をかく」「彫塑をつくる」「デザインする」と独立した3つの観点を設けた。その趣旨をみると，表現技能についての記述はなく，「創造的」や「発想」といった創造性に視点を置いた評価となっている。

(4) 中学校生徒指導要録の改訂について（通知）（昭和46年）より

美術の観点とその趣旨

絵画	美しく創造的に絵をかくたり，版画にすることができる。
----	----------------------------

彫塑	美しく創造的に彫塑をつくることができる。
デザイン	よい発想ができ，構想をねって表示したり，作成することができる。
工芸	適切な計画をたて，美的，機能的に工芸の制作ができる。
鑑賞	自然や美術作品の美しさを楽しみ味わい，又生活環境について造形的な関心をもっている。

先の通達で初めて美術に関心・態度の観点が加えられたにもかかわらず，この改訂により，「関心・意欲・態度」に関わる項目が削除された。他の教科も同様に，「関心・意欲・態度」に関わる項目が一斉に削除された。わずかに保健体育のみ「実践的な態度」の観点が残された。評価の観点は，絵画を第一番目の観点にあげ，彫塑，デザイン，工芸，鑑賞と個々の領域に分けられ，評価することになった。その趣旨をみると，前回の通達と同じく，「創造的」や「発想」といった創造性に視点を置いた評価となっている。

(5) 中学校生徒指導要録の改訂について（通知）（昭和55年）より

美術の観点とその趣旨

表現の能力	美しく創造的に絵をかくたり彫塑をつくったり，デザインや工芸を製作したりすることができる。
鑑賞の能力	絵画，彫刻，デザイン，工芸の良さや美しさを味わうことができる。
美術に対する関心・態度	美術を愛好する心情をもち，進んで表現したり鑑賞したりしようとする態度を身につけている。

前回の改訂では5領域に分けて評価されていた観点が，表現の中に絵画，彫塑，デザイン，工芸が含まれ一まとまりとなる。変わって，美術に対する関心・態度が復活する形となった。前回の改訂に反して，すべての教科で「関心・意欲・態度」にかかわる項目が一斉に復活している。学習に対する努力や日常の学習状況の記載を求めるなど，情意的領域に関する評価が求められたことが特徴である。

(6) 中学校生徒指導要録の改訂について（通知）（平成3年）より

美術の観点とその趣旨

美術への関心・意欲・態度	美術に親しみ，主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み，創造の喜びを味わおうとする。
発想や構想の能力	感じ取ったことや考えたことなどを基に，想像力を働かせて豊かに発想をし，よさや美しさなどを考え，創造的な構想をする。

創造的な技能	表現の意図に応じて創造的な技能や造形感覚を生かす。
鑑賞の能力	美術作品などに親しみ、そのよさや美しさなどを感じ取ったり、味わったりする。

この改訂では、前回の改訂で復活した「関心・意欲」にさらに「意欲」を加え、一番初めの観点としてあげられた。また、すべての教科の観点に「関心・意欲・態度」が、第一番目の観点にあげられることになる。

また、絵画・彫塑・デザイン、工芸の領域による分け方ではなくなり、前回の改訂の「表現の能力」にあたる観点を「発想や構想の能力」と「創造的な技能」とに分けた観点となった。

(7) 中学校生徒指導要録の改訂について（通知） （平成13年）より

美術の観点とその趣旨

美術への関心・意欲・態度	主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み、その喜びを味わい、美術を愛好していこうとする。
発想や構想の能力	感性や想像力を働かせて感じ取ったことや考えたことなどを基に、豊かに発想をし、よさや美しさなどを考え、心豊かで創造的な表現の構想をする。
創造的な技能	表現の技能を身に付け、造形感覚や感性などを働かせ、自分の表現方法を創意工夫し創造的に表す。
鑑賞の能力	美術作品や文化遺産などに親しみ、感性や想像力を働かせてよさや美しさを感じ取り味わったり、理解したりする。

前回と同じく、「関心・意欲・態度」に関わる項目が第一番目にあげられている。他のすべての教科でも同様である。関心・意欲・態度の趣旨をみると、「主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み、その喜びを味わい、美術を愛好していこうとする」とあり、前回の改訂の趣旨の「美術に親しみ、主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み、創造の喜びを味わおうとする」よりも、将来的な「関心・意欲・態度」にまで評価を言及している。今後、「関心・意欲・態度」を高めるために、どのような手立てをとるべきか指導の工夫が求められる。

(8) 美術の評価の観点にみる「意欲・関心・態度」の変遷についての考察

昭和24年の評価の観点と昭和30年の美術の観点とその趣旨には、「関心・意欲・態度」に関する記述を読み取ることができない。

しかし、昭和36年の美術の観点には、「美術への関心・態度」という観点が記述され、その趣旨には「美術に対して積極的な興味・関心を持ち、美術を愛好し、美術を生活に生かし生活を豊かにしようとする」と、具体的に

生活の中に、美術を生かす行動を評価することを明記している。さらに、「デザインする」「鑑賞する」の観点の趣旨にも、「作品を味わい楽しみ」という文が明記され、美術作品への関心・態度を評価するよう求める文が加えられている。

昭和46年の美術の観点には「美術への関心・態度」の観点こそ無くなったものの、「鑑賞」の観点の趣旨の中にはほぼ一致する内容が「鑑賞」の観点の趣旨に見られる。昭和46年の美術の観点の趣旨には、「自然や美術作品の美しさを楽しみ味わい、又生活環境についての造形的な関心をもっている」と、昭和36年の「美術への関心・態度」の観点の趣旨と比べ、「生活に生かし」の文言はなくなっている。また、昭和36年の「鑑賞」の観点の趣旨では、「批判・鑑賞することができる」の文言が無くなっている。これ以降、「鑑賞」の観点の趣旨に、「批判・鑑賞することができる」の文言は書かれていない。

昭和55年の美術の観点には、「美術に対する関心・態度」が再び明記された。その趣旨には、「美術を愛好する心情をもち、進んで表現したり、鑑賞したりしようとする態度を身につけている」とある。昭和36年と昭和46年の美術の観点とその趣旨に見られた「生活」に関する記述はなく、表現活動と鑑賞活動に見られる関心・態度を評価する記述である。

平成3年の美術の観点には、「美術への関心・意欲・態度」と「意欲」が加えられ、その趣旨には「美術に親しみ、主体的に表現や鑑賞の創造活動に取り組み、創造の喜びを味わおうとする」とある。昭和55年の趣旨と同じく「生活」に関する記述はなく、授業の「表現すること」や「鑑賞すること」の中で「美術への関心・意欲・態度」を評価するよう述べている。また、「鑑賞の能力」の観点の趣旨に「美術作品などに親しみ」の文が加えられ、「鑑賞」の観点の中でも、美術作品への関心・態度を評価するよう求める文が加えられている。

このように、昭和36年の中学校指導要録についての通達以来、「関心・意欲・態度」に関する評価は、評価する観点こそ変化しているが、継続して評価され続けていることがわかる。また、「関心・意欲・態度」に関する評価が、昭和46年の「鑑賞」の美術の観点に見られるように「鑑賞」の観点と密接に関わっていることもうかがえる。「関心・意欲・態度」を高める手立てとして、平成3年の「鑑賞の能力」の観点の趣旨に「美術作品などに親しみ」とあるように、「鑑賞の能力」の向上をはかる指導の工夫が有効なのではないかと考える。

II 相互鑑賞の必要性と問題点

(1) 相互鑑賞の必要性

かつて、エリオット W. アイズナーは「美術教育におけるカリキュラムの範囲に関して、表現的、批評的、文化的な各領域であり、カリキュラム開発の枠組みと

るものである。また、美術のカリキュラムが教育的に意味をもつようにするためには、一方で生徒の特性を考慮しなければならないが、他方では、美術の授業の特性にも注意を払わなければならない。そこでは、授業の質、授業の進行、授業の効果などが問題となる⁵⁾と、3領域を学ぶことの必要性和授業の計画から実施、評価にわたるあらゆる注意を払うことで、美術のカリキュラムが教育的に意味をもつと述べている。

身近な友達が制作した作品を鑑賞することは、「自分にもできるかもしれない」といった期待感を高める効果や友達から批判されることで、自分だけの思い込みを修正することや表現方法の幅を広げること、鑑賞能力の向上など、批評的、文化的な効果が考えられる。これらのことから、制作後の相互鑑賞にまで注意を払ったカリキュラムによって、教育的効果が上がると考える。

(2) 相互鑑賞の実践例 1

① 授業対象

黒部市立鷹施中学校

1 学年（男子44名，女子47名）

② 授業実施時期

平成21年 7月

③ 題材名

文字とイラストレーション

④ 相互鑑賞の実施方法

完成した作品に題名や工夫点、表現したかったことを予め文章で書き、それを作品に作品鑑賞者にも見やすく掲示して鑑賞させる。鑑賞者は作品からだけではなく、文章で表された作者も考えも参考にしながら、相互鑑賞を行う。

⑤ 相互鑑賞後の文例

<友達の作品から、彩色の工夫に気づく感想>

(生徒 1 の感想)

「背景の黒色が薄くなっていたり、濃くなっていたりして夜黒さと、雪の影響で明るくなっていることが想像できるなあと思いました。」

(生徒 2 の感想)

「チョコレートを描くのに、少し色の変化をつけて立体的に見せているのがすごいなあと思いました。背景と文字の色の組み合わせもはっきりしていてすてきだなと思いました。」

<友達の作品から、バランスのよさに気づく感想>

(生徒 3 の感想)

「Mさんの作品は『天真爛漫』という言葉を使って、とてもカラフルに仕上がっていました。Mさんの元気が伝わってくる作品でした。全体のバランスがよく、カワイイ作品です。」

<友達の作品から、筆づかいの工夫に気づく感想>

(生徒 4 の感想)

「周りの色と筆づかいで、草を表現していた。下の方

に石が描かれていて、一層自然の中に蛇がいる様子が伝わってくる。蛇の顔の表情も強そうによく合っている。」

⑥ 考察

これらの感想からは、「彩色の工夫」「バランスのよさ」「筆づかいの工夫」と、友達の表現の工夫に気づいている姿がある。また、「すてきなな」とか「工夫しているな」「カワイイ」といった表現には、友達の表現のよさを賞賛する姿勢がある。B.S.ブルームらによる情意的領域の5カテゴリー⁶⁾によると、「気づき」は、注意と気づきの獲得段階である「受容」であり、情意的領域の中では低次の段階であるとしている。

○情意的領域の5カテゴリー

- ① 注意と気づきの獲得段階である「受容」
- ② 興味と関心の深まり段階である「反応」
- ③ 積極的意欲の高まり段階である「価値付け」
- ④ 実践的態度の高まり段階である「価値の体制化」
- ⑤ 普遍的態度の形成段階である「価値による人格化」

(3) 相互鑑賞の実践例 1 の問題点

より高次の興味・関心・態度の段階である「反応」や「価値付け」となる相互鑑賞にならなかった理由の一つは、友達の作品を見て感想を書くという、一方的な鑑賞で終わっていることである。鑑賞した生徒は友達の作品から、表現工夫に気づくことができたが、自分の作品を客観的に見つめ直す機会が与えられていない。制作した生徒に感想を伝えていないので、反省材料として、生かすことができていない。もう一つは、作品の題名や工夫点が予め記入したものをしているため、作品以外の情報を考慮して、感想を書いていることである。これでは、作品に対して批評的にはなれない。そこで、これらの反省を生かした実践例 2 を検証したい。

その際、次にあげる相互鑑賞授業設定時の3の問題点も考慮した授業を検討したい。

- ① 美術の授業時間数が少ない。⁷⁾
- ② 自分の作品を客観的に見つめ直す機会を与えるには、制作した生徒に感想を伝える時間も必要なので、1時間の授業確保が必要である。
- ③ 相互鑑賞をするためには、すべての生徒の作品が仕上がっている必要がある。生徒の作品完成までにかかる時間に差があるために、相互鑑賞をするための時間設定がしにくい。

Ⅲ 相互鑑賞の実践例 2

(1) 充実した相互鑑賞にするため改善点

相互鑑賞に入る前に、自分の「作品に込めた思い」と「その思いを表現するためにどんな形にしたのか」をプリントに記入する。記入した文章は隠し、友達には見せない。友達から「作品から伝わる思い」と「なぜそう思ったのかその理由」を書いてもらう。5人で1グループに

なり、自分たちのグループ以外のグループの作品を鑑賞する。全員が一つの班の作品を一つ一つ見て回り、伝える思いやその理由を考えて、付箋紙に書いたものをプリントに貼っていく。班員全員が貼り終わったら、自分の作品についての友達の意見を読み、始めに自分が書いた言葉と見比べ、作品を見直し感想を書く。

また、構想や制作にかかる時間を短縮するため、構想してから制作に移るところを試行錯誤しながら、作り変えていけるようにする。そのために形の変更が可能な可塑性のある粘土を使用する。また、乾燥後ひび割れがおきないように紙粘土を用いた。紙粘土には軽量のものもあるが、完成時の安定感や重みをもたせるために軽量ではない紙粘土を使用した。さらに、小さな作品を制作することで制作時間を短縮させる。形成後の着色は行わず、形のみで自分の思いを表現する。

(2) 相互鑑賞の実践例 2

①授業対象

黒部市立鷹施中学校

1 学年（男子44名，女子47名）

②授業実施時期

平成21年 11月，12月

③題材名

彫刻家になろうー思いを伝える形ー

④題材のねらい

- 彫刻作品に興味・関心を抱き、自分の思いを表現しようとしたり、友達の作品に込めた思いを読み取ろうとしたりしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 自分の表現したい思いを、形がもつ動きやバランス、肌ざわりなどの材質感を考えて、創造的な構成を工夫することができる。(発想や構想の能力)
- 紙粘土の特質を理解し、表現意図に応じた形をいろいろな角度からとらえ、立体としての量感・塊、動きなどに気づき表現することができる。(創造的な技能)
- 彫刻作品が表している思いを、形や表現方法などから根拠をもって読み取ることができる。(鑑賞の能力)

⑤題材について

この題材では、彫刻作品には作品を見る人に、制作者の思いを伝えるという鑑賞を目的として作られたことを学ぶ。彫刻作品から作者の思いを感じ取ったり、実際に生徒自身も彫刻家となり思いを形に表現したりすることで見る人に思いを伝える。材料は、1年生としては扱いやすい紙粘土を用いる。小さい紙粘土なので、迫力には欠けるが、思いを形にするという体験を手軽に楽しむには、適切な大きさであると考えている。立体としての「形」の表し方については、いろいろな角度から形体をとらえ、立体としての量感・塊・動きなどに気付かせて表現させるようにする。

また、今回の改訂により、1学年においても「作品な

どに対する思いや考えを説明し合う」活動を位置づけている。造形的な視点を豊かにもって対象をとらえるためには、言葉で考えさせ整理することが重要だと考えているからである。言葉を使って他者と意見を交流することにより、自分一人では気付かなかった価値に気付くからである。形から思いを感じ取る能力は、また逆に、形で思いを伝える能力につながっていく。生徒はこれまでの学習で、色のもつ役割について学び、デザインセットの使い方やデザイン、スケッチを通して色のもつ可能性について学んできた。どの学習にも真剣に取り組む生徒が多く表現することを楽しんでいる。

この題材では色のもつ効果には頼らず、あえて形のみで思いを表現する。「形」は私たちの感情にさまざまな影響を与えている。四角い形、細長い形、丸い形と、形によってもたらされる感情を意識してとらえ、発想や構想の能力や創造的な技能、鑑賞の能力などを豊かに働かせることが大切である。そして、身の回りにある彫刻作品に興味・関心を高め、自ら進んで鑑賞する態度を育成したい。

(3) 授業の概要（全 5 時間）

<彫刻作品が置かれた目的を考えよう>（説明 1 時間）

本題材の導入では、身の回りにある彫刻作品に目を向けることから始めた。生活用品として利用されている立体物（テレビや車、家など）ではなく、目を楽しませるために制作された彫刻作品があることを学ぶ。

①身の回りにある立体の中から彫刻作品をさがす。

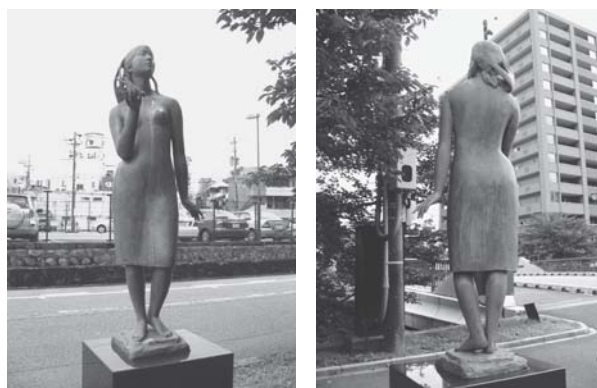
黒部市にある彫刻作品を思い出してみようと、問いかけたが、意外にも反応が悪かった。黒部市総合公園内にある彫刻を思い出してみようと問いかけてようやく噴水中央の虹色の作品を思い出してした。

②富山市にある彫刻作品を鑑賞する。

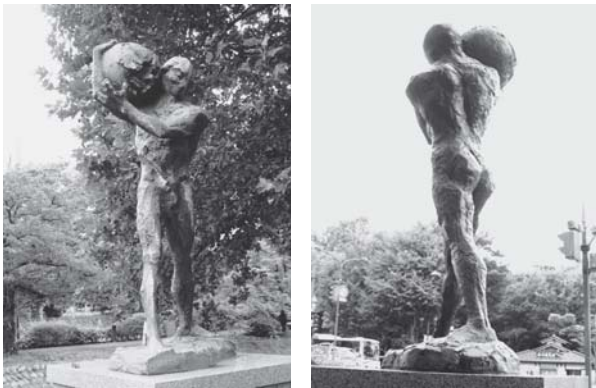
前後の方向から写した写真を用いプレゼンテーションソフトを活用し、生徒に見せることで、彫刻作品は四方八方から鑑賞することを学ぶ。

《富山市の松川べりの彫刻群の中から》

(写真 1, 2 : 女性と鳥がモチーフとなった作品 1)



(写真3, 4 : 男性が球体を持ち上げている作品2)



- ③彫刻作品の表現のおもしろさとは何かを理解する。
- ・いろいろな方向から形を楽しむことができる。
 - ・形の中に作者の思いを表現することができる。
 - ・立体の中に量感・塊・動きを表現することができる。

《彫刻についての説明後の感想》

「彫刻は目を楽しませるものだと思う。見て楽しめる彫刻を私も作りたいと思った。早く粘土で形を作りたい。」

「彫刻作品が美術的な鑑賞を目的に作られていることを知った。僕は、思いをしっかりと形に表現できるように、形を明確にすることができるようになりたい。」

授業後の感想では、上記のように自分も思いを形に表してみたいと彫刻作品制作に意欲を感じた生徒もいたが、ほとんどの生徒は、「彫刻作品はいろいろな方向からみるとということが分かった」「彫刻についてもっと知りたい」「鑑賞を目的に彫刻作品が公園などに置いてあることが分かった」など知識面の感想が多かった。「まだ何を作っているのか分からない」と制作に消極的な感想も多かった。

＜彫刻家になって思いを形に表そう＞（制作3時間）

- ・自分が彫刻で表したい思いは何か考え、形をイメージする。
- ・アイディアスケッチをし、形を工夫する。
- ・紙粘土で考えた形を制作する。

《写真5 : 生徒作品1》



「怒り」を表現するために炎の形を手のように表し、襲いかかろうとしているところを表現した作品。

《写真6 : 生徒作品2》



「協力」を表現するために、手と手をギュと握りしめる形を表現した作品。

＜友達の彫刻作品に込めた思いを感じ取ろう＞（相互鑑賞 1時間）

互いの作品を鑑賞し合うことで、作品の思いに気づいたり、形のもつ感情について理解を深めたりする。作品鑑賞の際には、作品が小さいので、視線を作品の高さに合わせ、作品を多方向から鑑賞するよう指導した。

《授業実践後の生徒の感想》

《相互鑑賞事例1》－友達の意見に驚いている例－

	自分の考え	友達の考え
思い	希望	1 楽しさ 2 不安 3 希望
考えた理由	人はそれぞれに、いろいろな夢があるから、いろいろな形を上へ伸びていくように組み合わせた。	1 いろんなところから、形が出ているから。 2 今にも倒れそうだから 3 高くのぼっていきそうな感じだから。

相互鑑賞事例1の生徒は、「希望」を細長い直方体、横長の直方体、縦長の直方体を木の枝のようにバランスを取りながら、上に向かってくっつけていくことで「希望」を表現した。友達の考えには、高く上に伸びる形から、「希望」が表現されているという意見が出された。しかし、一方でその不安定な形から「不安」と感じた生徒がいた。いろんな所からいろんな形が出ていることに目を向け、「楽しさ」を感じたという意見も見られた。

《相互鑑賞事例1の作品を制作した生徒の感想》

「自分が『希望』という思いを込めて作った形だったけど、他の人から見たら『不安』や『楽しさ』など違う思いを感じた人もいたので、びっくりした。アドバイスもみんないろいろ考えてくれたので、自分でもなるほどと納得するところもあって参考になった。」

《相互鑑賞事例2》—別の見方を発見した例—

	自分の考え	友達の考え
思い	雨の日のじめじめした憂鬱な気持ち	1 一生懸命 2 ゆっくり 3 軟弱
考えた理由	雨の日のじめじめした日に、カタツムリはよくいるから、カタツムリの動きをつけて表現した。	1 雨の中を懸命に動いている様子が伝わるから 2 時間がゆっくり進んでいるように感じるから 3 ひよろひよろな形のカタツムリだから

相互鑑賞事例2の生徒は、「憂鬱な気持ち」を表現するために、かたつむりの姿に動きをつけて表現したのだが、友達はその動きに注目し、「ゆっくり」とか「一生懸命」な姿を表現していると捉えたり、その細く表現された形から「軟弱」と感じ取ったりした。生徒がかたつむりの動く形から表現しようと考えた「憂鬱な気持ち」という意見は書かれなかった。

《相互鑑賞事例2の作品を制作した生徒の感想》

「私は雨の日のじめじめした気持ちをかたつむりで表現しようと思ったけど、みんなは作品を見て、『一生懸命』とか『ゆっくり』『のんびり』と、自分では考えもしなかった見方をしていた。でも、改めて作品を見てそういう見方もあるなぁと感心した。友達の意見を聞くことも、大切だと思った。」

《相互鑑賞事例3》—表現の難しさと楽しさを実感した例—

	自分の考え	友達の考え
思い	おだやかさ	1 うれしさ 2 よろこび 3 静かさ 4 美しさ
考えた理由	金魚の丸みを帯びた形を作り、さらに尾びれの形をひらひらに表し、優雅にくねらせることでおだやかさを表現した。	1 金魚の尾びれがヒラヒラしていてうれしそうに見えた。 2 海中を泳いでいる様子がでていて、うれしそうだから。 3 尾びれが音を立てず、ひらひらしているように見えたから。 4 尾びれがとてもきれいな形だから。

相互鑑賞事例3の生徒は、金魚の姿を尾びれを極端にひらひらと揺れたように制作することで「おだやかさ」を表現しようとしていた。作品を鑑賞した生徒の意見には「おだやかさ」という言葉はなく、「うれしさ」「よろ

こび」「静かさ」「美しさ」と思い思いの意見が出された。考えた理由には、一様に尾びれのひらひらした形に注目した意見が出された。

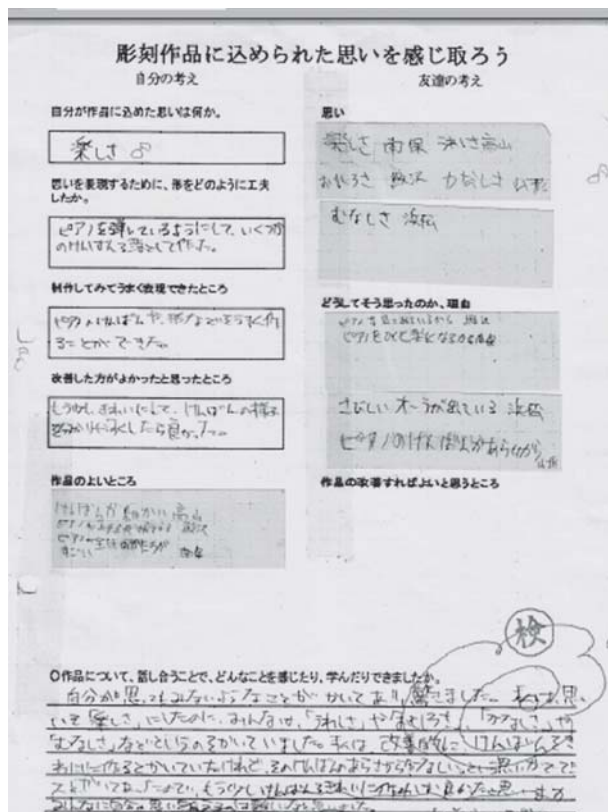
《相互鑑賞事例3の作品を制作した生徒の感想》

「私は、おだやかさを表現したけど、みんなはうれしさとか喜びを表現していると書いていました。改めて自分の作品を見直してみると、確かにおだやかさは出ていないなと思いました。この授業を通して、自分の思いを表現することは難しいけれど、楽しいことだと学びました。」

(4) 相互鑑賞を終えての感想を通して見られる生徒の情意面の変化と考察

相互鑑賞後、自分の考えと友達の考えを比べ、感じたことを感想欄に記入した。生徒の感想を分類すると、6つに分けることができる。

1. 自分の思いが作品を通して相手に伝えることが出来たことを喜んでいる生徒の感想
2. 友達の意見で、自分の表現方法を見直し、改善しようとしている生徒の感想
3. 友達の意見の中から、参考にしたいと感じた意見を選んでいる生徒の感想
4. 友達の意見に惑わされることなく、改めて自分の表現の仕方のよさを確信している生徒の感想
5. 思いを形にすることに関心を高めている生徒の感想
6. 相互鑑賞することに関心を高めている生徒の感想



(図1：友達の付箋が貼られたプリント)

< 1. 自分の思いが作品を通して相手に伝わったことを喜んでいる生徒の感想 >

「私は、『喜び』という思いを伝えたいと考えていたら、友達は『喜び』や『うれしさ』という思いを感じてくれていたので、すごくうれしかった。改善点でリボンをもっと大きくすればよかったと思っていたら、友達も同じようにアドバイスに書いてくれていて、同じ考えをもつ人がいて心強く感じた。」

「自分が作品に込めた思いがみんなに伝わっていてよかった。私は、ケーキのクリームのたれ方がどこから見ても違ったように見せることで『楽しみ』を表現したのだが、ケーキを形作ったことで、食べる楽しみとしてもとらえていることが分かった。自分の作品から『好み』という思いを感じてくれていた友達がいていいなと思った。」

これらの感想からは、「すごくうれしかった」「心強く感じた」「いいなと思った」という感情を表す表現から友達の意見に喜ぶ姿が見られる。情意的領域の評価カテゴリ⁸⁾に照らし合わせると、興味と感心の深まり段階「反応」で、(反応の満足)と考えられる。

< 2. 友達の意見で、自分の表現方法を見直し、改善しようとしている生徒の感想 >

「友達の意見を読むと、葉の模様をつければ良いといっている人がいて、私もそう思った。葉脈をつければもっと自分が表現したい悲しみが表現できたと思った。」

「『思いを表現するために、形をどのように工夫したか』という質問に、私は『りんごの中が見えるようにした』と書いたけど、友達の意見は『虫がりんごをおいしそうに食べていた』と書いてくれたので確かにそうだなと思いました。友達の意見で、自分の気付かなかったことに気付くことができた。」

「自分が思ってもみなかったことが書いてあって驚きました。私は『ピアノ』を作ることで『楽しさ』を表現したつもりだったけど、『かなしさ』という意見があって、その理由が『ピアノの鍵盤の作り方が荒々しいから』と書いてあった。もう少し鍵盤をきれいにつくればよかったと思った。」

これらの感想からは、「私もそう思った」「確かにそうだな」「もう少し鍵盤をきれいにつくればよかったと思った」と、友達の意見のよさを見つけて参考にしようとしている。情意的領域の評価カテゴリに照らし合わせると、積極的意欲の高まり段階「価値づけ」で(価値の承認)と考えられる。

< 3. 友達の意見の中から、参考にしたいと感じた意見を選んでる生徒の感想 >

「みんなで作品について話し合うことで、自分の作品の改善点や自分では気付かなかった作品のよいところが多くみつかった。また、アドバイスの中で『作品の表面

をもっときれいにすればいい』というアドバイスが参考になった。」

この感想からは、「アドバイスの中で『作品の表面をもっときれいにすればいい』というアドバイスが参考になった」と、友達の表現の中から参考になる意見を選ぶ姿が感じ取れる。情意的領域の評価カテゴリに照らし合わせると、積極的意欲の高まり段階「価値」づけで(価値の選択)と考えられる。

< 4. 友達の意見に惑わされることなく、改めて自分の表現の仕方のよさを確信している生徒の感想 >

「やっぱり、作品を見ての意見は一人ひとり違うなと思いました。でも、みんなが同じように、猫の顔をつけた方がいいというアドバイスをくれたけど、私は猫の顔の表情をつけない方が、好奇心というテーマを表しやすいと考えたし、私なりにはうまく表せたかなと思う。」

「同じ思いでも、人それぞれに違うように考えていることが分かった。ただ、言葉の表現は違っていたが、自分の表現したかった思いとほぼ同じだった。表現した思いが分かってもらえてよかった。友達から『もっと何か加えればいい』というアドバイスをもらったけど、僕は他の何かを加えると別の雑念が入るので、つくつくのとげの形一筋でいきたい。」

これらの感想からは、「猫の顔をつけた方がいいというアドバイスをくれたけど、私は猫の顔の表情をつけない方が、好奇心というテーマを表しやすいと考えたし、私なりにはうまく表せたかなと思う」「友達から『もっと何か加えればいい』というアドバイスをもらったけど、僕は他の何かを加えると別の雑念が入るので、つくつくのとげの形一筋でいきたい」といった表現には、友達の意見は意見として捉えるが、自分は自分の価値観を認めているという姿勢が感じ取れる。情意的領域の評価カテゴリに照らし合わせると、実践的態度の高まり段階「価値の体制化」の(価値の概念化)と捉えられる。

情意的領域の評価カテゴリ

		関心	意欲	態度
① 受容 (注意と気づきの獲得段階)	①-1 (感知) ~に気づく。	○		
	①-2 (積極的受容) ~に注意して~する。	○	○	
	①-3 (注意の集中・選択) ~に注意を集中させる。	○	○	
② 反応 (興味と関心の深まり段階)	②-1 (反応の黙認) 言われたとおりに~する。	○	○	
	②-2 (自発的反応) 自分からすすんで~する。	○	○	○
	②-3 (反応の満足) よろこんで~する。	○	○	○

③ 価値付け (積極的意欲の高まり段階)	③-1 (価値の承認) ~のよさを見つけて~する。 ③-2 (価値の選択) ~のよさを選んで~する。 ③-3 (価値への傾倒) ~のよさを信じて~する。	○	○	○
④ 価値の体制化 (実践的態度の高まり段階)	④-1 (価値の概念化) ~の価値を認めて~する。 ④-2 (価値体系の体制化) ~について自分の価値を高めて~する。	○	○	○
⑤ 価値による人格化 (普遍的態度の形成段階)	⑤-1 (一般化された構え) ~について普遍的な自分の価値観をつくりあげる。 ⑤-2 (人格化) ~について確固たる自己の価値観をともなつて~する。			

< 5. 思いを形にすることに関心を高めている生徒の感想 >

「いろいろな思いを形にするのは難しいと思って作り始めたけど、みんなの作った作品を見ると、どれも同じ形がなくて見ていてとても楽しめた。喜びを表現した人が多かったけど、同じ喜びを表現しても、それぞれに違った形のものができるんだと思いました。」

「他の人が自分の作品を見てどう思ったかを知ることができた。もっと自分の伝えたい思いを表現するにはどうしたらいいかも意見を聞いたり、友達作品を見て参考になったりしたので、次に作品を作る時に生かせたらいいなと思った。」

「他の人の作品を見ていたら、いろんな形を作っていてすごいと感心した。見る人によって、何に見えるかも違っていただけでもおもしろいと思った。」

これらの感想からは、「楽しめた」「次に生かせたらいいな」「すごいと感心した」と、相互鑑賞を通して関心を高めている様子が伝わってくる。情意的領域の評価カテゴリーに照らし合わせると、興味と関心の深まり段階「反応」のうち(反応の満足)と捉えられる。

< 6. 相互鑑賞することに関心を高めている生徒の感想 >

「自分が作品に込めた思いは、『わくわく』だったけど、友達が作品から感じた思いは、『夢』だったので、人によっていろんな見方があって面白いと思いました。私は本を開いた形で『わくわく』を表現したけど、『本は夢があって面白いから』という意見と『わくわく』は少し似ているので、同じように感じてもらえているところもあってよかった。」

「一人一人作品に込めた思いが違っていただけでも作品から思いがしっかり感じ取れることがおもしろかった。」

人の作品をじっくり鑑賞することで、新しい見方ができたりや発見ができたりして、すごく不思議だった。」

これらの感想からは、「人によっていろんな見方があって面白い」「一人一人作品に込めた思いが違っていただけでも作品から思いがしっかり感じ取れることがおもしろかった」「新しい見方ができたりや発見ができたりして、すごく不思議だった」と、これまで気づかなかった価値のよさを見つけている様子が伝わってくる。情意的領域の評価カテゴリーに照らし合わせると、積極的意欲の高まりの段階「価値付け」のうち(価値の承認)と考えられる。

IV 本実践から見えてきたこと

美術のもつ役割の一つに形や色を通して、作品を見る人に作者の思いを伝えるという面がある。自分の考えを隠して、相互鑑賞したことで、自分の伝えたいことが見る人に伝わったか、批評的な目で見られるという体験することになった。生徒は作品を客観的な目で見られ、緊張感を味わっていることが、生徒の様子からうかがい知ることができた。自分の予想と友達のことを比べることで、多くの生徒に、「驚き」や「喜び」「発見」といった高次の関心・意欲・態度を感じさせる文章が見られた。制作した作品の技能面を問題とせず、「思いが伝わったかどうか」だけに問題を焦点化したことや粘土に色をつけなかったことも、形について深く考える一因になったと考えられる。

作品を制作しただけでその単元を終わってしまうのではなく、制作した作品が、見る人にどのように受け止められるのかを知ること、これまで自分だけの一方的な見方だったものが広がりをもつことになった。「他の人から見たら『不安』や『楽しさ』など違う思いを感じた人もいたので、びっくりした」といった意見があるように形が表す思いは、一通りのものではない。相互鑑賞の仕方を工夫することで、美術への関心・意欲・態度を高めるために効果的であることが分かった。

また、「新しい見方ができたりや発見ができたりして、すごく不思議だった」という感想を書いた生徒は、作品制作の間、ずっと、細かい表現にこだわっていた生徒である。ところが、相互鑑賞で他の生徒の作品を見ると、ただ石状の塊を組み合わせた作品に自分の作品より迫力を感じ、自分の表現の方向とは違う表現の仕方に新たな価値を見出していた。この生徒にとっては、相互鑑賞が自分とは違う表現方法に気づく機会となった。教師からのアドバイスには聞く耳をもたなかったのに、自ら実感をもって捉えることで、「不思議」な感覚として実感できたようである。

おわりに

本論で明らかになった生徒の相互鑑賞による驚きや不

思議といった情意面の変化が、美術への関心・意欲・態度を高めていることが分かった。しかし、一人ひとりが相互鑑賞を通して感じた思いを一人のものにとどまらせず、学級全体にフィードバックすることで、さらに彫刻作品への関心を高めることができると考える。美術の授業数が現行のままである以上、これ以上授業に組み込むことは難しい。そこで、今後は美術の定期テストの中に生徒の感想を使ったテストを考えていくことはできるのではないかと考える。また、どの単元でもこのように制作者の意図を隠した相互鑑賞が効果的であるわけではないので、その単元に応じた効果的な相互鑑賞の方法を考えていく必要がある。今後も関心・意欲・態度を高めるための研究を深めていきたい。

注

- 1) 文部科学省「平成20年中学校学習指導要領解説 美術編」p.3
- 2) J.S.ブルーナー著「教育の過程」岩波書店1986 p.94
- 3) 長瀬荘一著「絶対評価への挑戦…② 関心・意

欲・態度（情意的領域）の絶対評価」明治図書 2003年 p.54

- 4) 7 図画工作, 美術. [PDF] www.nier.go.jp/kiso/sisitu/siryoul/3-07.pdf
- 5) エリオットW.アイズナー著「美術教育と子どもの知的発達」黎明書房 2003年 p.212
- 6) 長瀬荘一著「絶対評価への挑戦…② 関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価」明治図書 2003年 p.167
- 7) 昭和52年の学習指導要領の改訂では1年70時間2年70時間3年35時間だった授業時数が、平成元年の改訂で、1年70時間2年35～70時間3年35時間となり、平成10年の改訂では、1年45時間2年35時間3年35時間と縮減されている。
- 8) 長瀬荘一著「絶対評価への挑戦…② 関心・意欲・態度（情意的領域）の絶対評価」明治図書 2003年 p.168

(2010年8月31日受付)

(2010年10月6日受理)